

第11回 ブックショートアワード

タイトル：狐独は雨に流されて

著者名：亜古 鐘彦

文字数：4,968 文字

<あらすじ>

久しぶりの帰省から戻った朝美はイナリの家へ向かった。“個人的な孤独”を共有したあの大晦日がこの難儀なふたつの人生を繋いで、お互いの綻びを繕い合っている。知ってもらう必要は無かったけど、あなただったから話せた。悩みが無くなる訳ではない。でもふたりなら笑ってふざけて生きていけそうだ。

久しぶりの旅の終わりを祝って、あるいは呪って、晴れた空から雨粒が落ちてきた。

タンクトップの上に羽織ったシャツが肌に張り付く。適当にまとめた髪が崩れて、大粒の雫が頬を流れた。

「馬鹿にしてんのか」

午後4時、穏やかな駅前の隅で朝美は呟いた。普段なら使わない強い語気に、言った端から自分でも驚いた。しかし言ってしまうなければ、内側でぐるぐると渦巻く何か膨れて破裂してしまうと思った。

駅を飛び出した朝美は、傘もささず、小さなキャリーケースを右手で引きながら、足にまかせて道を進んだ。目の前に立ち込める焦燥感に体がぐいぐいと引っ張られているようで、どこまでも居心地が悪い。でも、どこに向かっているかは、この足も朝美も知っている。

駅前から東へ伸びる大通りの四つ辻を2つ通り過ぎて、3つ目を右へ。目の前に現れるアパートの303号室のベルを鳴らす。

「おーやっほ。うわ、びしょ濡れじゃん！ちょっと待ってタオル出すから」

「イナリの家行こうと思ったら、雨降ってきたんだけど。どういう嫌がらせ〜」

「よくあるじゃん、狐の嫁入り。はいはい、部屋入ってー」

イナリが脱衣所でわさわさとタオルを取り出して、朝美へ投げる。案外降っていたのかと今更気づき、余すところなく雨に濡れていた髪や服や荷物を適当に拭いた。

「はい、保冷剤も。腫れそう、それ」

「何が？」

「アザミちゃんのおめめ。赤いよ」

朝美は手渡された保冷剤を静かに目に当てて、そうだ、泣いていたんだと思い出した。

「で、久しぶりの帰省はどうだった？」

イナリに尋ねられて初めて、朝美は実家に帰った2日間を振り返った。唇を噛み、適切な言葉を捻り出そうと頭の中を整理する。なんと云えば、誰も傷付けないのか。

「ううん、やっぱり、う〜ん…ずっと、申し訳なかった。かな」

言葉にすると、目を覆った保冷剤の端から涙が伝って落ちた。冷たい氷と熱い雫が混ざって変な感じがする。泣きたいわけではないのにな、と思いながらも朝美は涙を抑えられなか

った。

「頑張ったね。寝れた？」

「…朝方に2時間くらいは、寝れたかな」

上擦る声で答える朝美を、イナリがよしよしと撫でる。お湯を沸かしているポットの機械音だけが静かに響く部屋で、涙が落ち着くのを待った。

カチッ。

ポットが湧いた合図を出してイナリが紅茶を淹れた頃、涙と鼻水の音も止み、朝美がやっと顔を上げた。

「ありがと、いただきます」

「ほれ、クッキーもある」

緊張で何を食べても味がしなかった2日間の後の紅茶が、朝美の体に沁み込んだ。ほろほろと口の中でほどけるクッキーの優しい味に心が安らぐ。

「どうにかして、あんたのその"申し訳ない"の気持ちを、どっかにピャーっと投げ飛ばせたらいいんだけどねえ」

イナリが豪快に腕を放り出して、投げる仕草をして見せる。

「ははっ、ピャーっとねえ。難しいねえ」

誰にも話したことの無い"家族"のことを、朝美がイナリに話したのは大学1年生の冬。

この年、イナリは独り暮らしをしているアパートの近くにある神社へ初詣をするんだと宣言し、「あの神社の、今年最初の参拝者になる！」と息巻いていた。何かと制限されっぱなしの大学生生活の中で、少しでも面白みを見出そうとするイナリに便乗して、朝美が「じゃあ私も」と声をかけたのが始まりだった。他の友達も別に予定があったり、外出自体を控えていたりして集まりは芳しくなく、結局ふたりで決行することになった。今年の年越しは、大学生の有り余る時間を初詣に捧げるんだ、と決意したふたりの様子はなんとも子供じみていたが、同時に、馬鹿にできない眩しさと自由さに満ちていた。

「朝美は、帰省しなくてよかったの？」

「うん、…今年はしないことにした。もしウイルス持ち帰って感染させちゃったら嫌だしさ」

「今年はそんな感じだね。近くだったら帰ってる人もいるみたいだけど」

「そうだね…」

冬の静けさが、部屋の中まで入り込んできたようなふいの沈黙。朝美は急いで他の話題を探した。しかし、頭の中の引き出しを片っ端から開けようとするのに、その引き出しさえ見つからない。ザーっという無機質な雑音と共に、脈絡のない言葉の断片が脳内を覆っているような感覚に襲われた。

「4月から一緒だけどさ、そんな焦った顔の朝美初めて見た」

はっとした。朝美は粘ろうと思ったが、イナリの目を見てすぐに諦めた。

「ごめん、変な空気にして。本当はさ、なんか…、常識的に通じる“帰省できない理由”があって安心したんだよね」

大晦日独特の終末めいた雰囲気と、ふたりだけの空気に絆されて朝美は自分の家族のことを話し始めた。正確には、自分が家族に対して抱いているどうしようもない気持ちのことを。

短い相槌をぽつぽつと打ちながら、イナリは終始表情ひとつ変えずに朝美の話を聞いた。その相槌は肯定も、否定も、疑問も、同情も含まない、極めてニュートラルなものだった。だからこそ、朝美は話し続けられた。

しばらく言葉を続けて、「って感じ」と朝美がゆるく話を終えた後も、イナリはただ頷いて、決して過度な反応は見せなかった。

「ありがとね、気力使ってくれて。こういう話って、外に出すのにすごく力があると思うからさ～、特にこういうのは。なんていうか“個人的な孤独”みたいなのはね」

自分の独白の内容について、何かしらコメントがあるかと身構えていた朝美は拍子抜けして、「うん」とだけ返事をした。そして、胸をなでおろした。もしここで、悪意無く、自分が傷つけられるようなことを言われたらどうしようと、朝美は心配でたまらなかったのだ。この感情は共感されるべきものではない、と自分でわかっている。しかし、それを抱えてしまっている自分を否定されてしまっは、どうすることもできない。

「でもさ、なんか安心した。朝美って、なんでもソツなくこなす器用屋さんって感じだったから、朝美にも難しいことがあるんだってわかってアタシは嬉しいよ」

いつも通りのイナリの態度に、強張っていた表情筋が緩む。

「なんでこんなに不器用なんだって思うよ、自分では」

「朝美は人に嘘がつけないんだよ。それは良いことだし、アタシはそういう人間の方が好き」

イナリは机にあったみかんをひとつ取って、皮を剥き始めた。

「じゃあ、アザミって呼ぼうか！」

「ん？」

意図を読みかねる提案に、朝美は目を丸くしてイナリを見る。

「あの、野原とかに咲いてるやつ。花の付け根がトゲトゲしてる。朝美はもっとトゲトゲしていいんだよ。誰も傷付けないようにして、内側にそのトゲを仕舞ってたら自分が血だらけになる」

朝美は路傍に咲くアザミの花を思い浮かべた。

「ちょっと、トゲトゲしすぎじゃない？」

「いいの！あれくらいを目指すってこと」

イナリらしい突飛な発想は、いつも朝美の想像の外にある。

夜も更けた 23 時 55 分。年越しもいよいよ大詰め。何気なく、朝美はイナリに問いかけた。

「イナリは何かないの？イナリの“個人的な孤独”」

みかんを頬張っていたイナリは、にんまりと笑って体を起こした。

「アタシはね」

淡々と言葉を続けるイナリの話の聞いている内に、年を越していた。魔法がかかったように、ふたりは少しも眠くはなかった。それから朝まで他愛のない話をして、完全に朝日が昇った頃に寝落ちた。初詣のことは忘れてしまっていたけれど、目を覚まして大きく伸びをした朝美とイナリはふたりともこう思った。

生まれて初めて深呼吸できたみたいだ。

夕方 5 時半を回る頃には、雨も上がり、朝美の髪もすっかり乾いていた。303 号室からは、いつものふざけ合うふたりの声が聞こえてくる。

「週明け提出のレポートまだ書いてなかった～、アザミは？」

「あれすぐ終わったよ。授業の内容まとめて、事例書くだけでしょ」

「やっぱり天才は違うな」

あの喫茶店のメニューがどうだ、この前公開した映画がこうだ、あーでもないこーでもない。イナリとのなんでもない会話が心地いい。朝美は、さっきまでの泥沼のような気持ちも忘れて、広い原っぱに出たように大きく腕を上げて伸びをした。

「ねえ。イナリは、あれからもやっぱり誰かがいなくなるのが怖い？」

「ん？…あっ、あの年越しの日か」

あの日、朝美の告白の後、イナリは自分の孤独について話した。これから、いつか必ず起こる“別れ”が言いようもなく恐ろしいのだと。

イナリが10歳の時、祖母が亡くなった。棺桶に横たわる祖母の穏やかな顔を見た時、涙が止まらなくなったのをよく覚えていると、至極落ち着いた声でイナリは話していた。『この人はここにいるけど、もうここにはいないことの何よりの証明なんだ』と理解して、“いなくなる”ということがもたらす現実に打ちのめされた。そして、いなくなるのはその人のみならず、この人と過ごしていた時の自分もいなくなるのだと気がついた。

「今も普通に怖いよ。みんな死んでくれるなよ～ってずっと思ってる」

「イナリはみんなから相談されたりすることも多いしさ、友達も多いから…難儀だね」

「みんな傲慢だよ。てんでに生きてがるクセに、何かと構ってほしいんだから。ほっとけないじゃんね、もう」

さっぱりとした性格に見えて、その実、イナリの誰よりも優しい心根を朝美は知っている。「でも私は今のとこ、死ぬ予定ないから大丈夫よ。イナリと温泉行く約束してるし、読んでる漫画まだ完結してないし、映画の無料券たまってるし。うん、全然まだ当分死ねない」

指折り数える朝美の死ねない理由に、イナリは声を上げて笑った。

「そういうとこ！ほんとに！アザミの好きなとこ。重い気持ちを、ふーっと軽い気持ちにしてくれるんだよ、あんたは」

少し涙目で子供のように手足をばたばたさせるイナリを、朝美は目を細めて見つめる。

「イナリもそうだけどね」

窓から見える電線に、雨水が滴っている。あれほど鬱陶しかった雨が、今の朝美にはやけに綺麗に光って見えた。

日が傾き、西日が部屋のカーテンを温めている。

「これからもよろしくね、アザミ」

イナリが何気なく口にした。

「よろしくけど、急に？」

「いや、これからたぶん大変なんだよアタシたちは。就活とか人生とかさ。でもアザミがいたら全部笑ってできる気がする」

長いと思っていた大学生活もあと2年。

「忙しくなるね。私はいろいろ悩むんだろうなあ」

「その時はまた、ここで作戦会議開こう。保冷剤もあるし、アザミ用の慰めクッキーもある」

朝美はイナリが差し出した手のひらにハイタッチした。不安と同じくらい、根拠のない自信が湧いてきた。

大学4年生の秋、ようやく暑さが緩みはじめて、この303号室にも木枯らしが吹きこんできた。イナリの子想通り、怒涛の就活に日々のタイムスケジュールは埋め尽くされ、内定を貰ったかと思えば、すぐに各ゼミの教授から卒論の進捗確認の連絡が飛んできた。

パソコンを前に、論文資料と格闘をしながら作業を進め、気づけば時計は午後4時を指していた。「気分転換にその辺散歩してみようよ」とイナリが言って、ふたりは外へ出た。見慣れた景色を前に、ふたりで伸びをする。するとそれを合図にしたかのように、晴れた空から雨粒が落ちてきた。

「あれ、雨降ってきたね。晴れてるけど」

朝美が手のひらを上に向けて空の様子を伺う。

「狐の嫁入りだ〜」

イナリは、どこかで聞いた『狐は、雨を降らせて人間が慌てて家に駆け込んでいる内に結婚式を挙げる』という伝承を話した。

「青空をひとり占めして幸せになるんだね。あ、ふたり占めか」

ぽつぽつ降る雨がアスファルトに光を散らしている。

「^{いなさと}稲里真琴と申します。アザミさん、これからもしっかりふざけさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします」

「^{うりた}瓜田朝美と申します。こちらこそ、イナリさん。ふざけて笑って生きましょう」

いつかの涙と、押し込めた溜め息がささやかな雨に流されていく。朝美は、これからも続いていくイナリとのどうしようもなく素敵であろう日々を想像して思わず口角を上げた。

いつかも、今日のような天気雨が降っていた気がする。その時も、隣にイナリがいた。

朝美は、これからも家族に対するコンプレックスを抱えて生きていく。イナリは、いつか出会う別れに打ちのめされる。でも、もう孤独とは思わない。ふたりは時折肩をぶつかけたり、跳ねたりしながら、燦然と降る雨の中を傘もささずに笑いながら進んでいく。